グスタフ・マーラー
「交響曲 第四番」からイメージされたお話

コレギウム・ムジクム静岡 第34回演奏会のために

小川雅子

1

ぼくはたった一人、草原に立っている。
見渡す限りの緑。子どものころ、「原っぱ」と呼んでいたよりもっとずっと広い、本当にだれもいない、見渡す限りの草原。
風がぼくの髪をゆらす。
原っぱなら、だれもいなくても、待っていれば、遊んでいれば、友だちが来た。
でもここは、だれもいない。
ぼくは動けず、ただ、目の前のだだっ広い草原を見つめている。

草いきれの匂いがする。
風が、緑の濃い匂いを運んできた。
ぼくはしゃがんで足元の草を抜く。立ち上がり、そして目の前で振ってみる。タクトを振るように。
「少し、短すぎるかな」
別の草を抜く。
「こっちのは細すぎる」
また別の草。

「今度は、柔らかすぎだ」
ぼくは進む。さっきまで動けなかったのに、足が前にどんどん進む。もっとちょうどいい草があるはずだと。
そして気づいた。
子どものころ、こうしてぼくは原っぱに生えている草を抜き、タクトを振るように遊んだこと。
ぼくの頭の中には、いつも音楽が流れていた。

あれ……。
遠くから鈴の音が聞こえてくる。
なんだろう……。
だれかいるのかな……。
ぼくは帽子をかぶり直し、音のする方へ、ゆっくりと、歩き出す。

第一楽章　中庸の速さで、速すぎずに

2

小さいときから、音楽はずっとぼくのそばにあった。
嬉しいときも、
楽しいときも、
悲しいときも、
寂しいときも、
いつも、ぼくに寄り添ってくれた。
世界はこんなにも広くて美しいんだよ、
こんなにも豊かなんだよ、
ほら、足を踏み出してごらん、
と、ぼくをはげまし、ぼくの背中を押してくれた。

子どものころ、原っぱにいくと草を探した。
ちょうどいいのを見つけ、タクトのように振ると、頭の中に音楽が流れた。
「指揮者みたいだねー」
「音楽会、しようよ」

「いいねいいね。みんなで歌おうー」
ぼくのもとに友だちが集まってきて、原っぱに歌声が響きわたる。
高い声の子もいれば、低い声の子もいる。みんなの声を合わせ、足りないところを補い合いながら、そのときにしか出せない音を作る。
楽しかった。
だからぼくは指揮者を目指したんだ。

なのに、今はどうだろう……。
努力して、苦労して、音楽の道を進み、夢だった指揮者になった。
いい音を、いい音楽をと、がむしゃらに突き進んだ。
突き進んだつもりだったのに……。

激しい感情が、ぼくの心の中を奔流(ほんりゅう)のように流れ、今、自分が置かれている状況を突きつける。

「どうして！」
指揮台の上に立ち、タクトを振るぼく。現実のぼくは、指揮台の上でひとりぼっちだった。
みんな、思うような音を出してくれない。
「ここはもっと繊細に」

「ここはもっとテンポよく」
ぼくはあらんかぎりの声を張り上げ、訴える。
でも、作り出される音楽の、欠けたところばかりが耳についてしまう。
どれもこれも、だれもかれも、満足いく音を出してくれない。
「どうして！」
もう一度、声を張り上げる。

そのとき、みんなの顔が消えた。顔だけが。
音は聞こえるのに、演奏する姿はあるのに、顔だけがない。
のっぺらぼうたちの演奏……。
指揮台の上で、ぼくはたった一人だった。

第二楽章　落ち着いたテンポで、慌ただしくなく

3

鈴の音が聞こえる。
ぼくは足を早める。一刻も早く、その音源を確かめたくて。聞こえるのに見えないのはいやだった。
夢中で走り続ける。
はあ、はあ、はあ。
息が切れ、立ち止まる。
「どうしてぼくの前に現れてくれないの？」
「ずっと、そばにいてくれたじゃないか！」
あんなにも近くに感じていた音楽は、少しも近づかない。寄り添ってくれない。

目の前に、ちょうどいいい草を見つけた。ふいに、ぼくはその名前を思い出す。
「これはススキ……」
久しぶりに、名前を呼んだ気がした。
「そうだ、これはススキだ」
手にした葉っぱのタクトを見つめる。そして、ずっと忘れていたことに、今、気づく。
ひとつひとつの葉っぱに名前があるように、一人一人に声があり、一人一人に名前があるというこ

とを……。

「そこのフルート」
「そこのホルン」
「そこのチェロ」
ぼくは彼らを楽器で呼んだ。

だれもぼくを、理解してくれない。
だれもぼくを、見ようとしてくれない。
そんなの当たり前だった。
顔のない、のっぺらぼうにしたのはぼくだった。
ぼくはいつのまにか思い上がり、みんなに名前があるということすら忘れていた。

一人一人の顔を思い浮かべ、名前を呼ぶ。
指揮台の上でぼくが一人であるように、演奏する彼らもまた、みな一人なのだ。それでも、ともに音を奏でればハーモニーが生まれる。欠けたところを補い合う仲間たち。
「ああ、みんなに会いたいなあ」
悲しいときも、さみしいときも、音楽が寄り添ってくれたと感じていたのは、演奏する人たちが一

緒だったからだと、今さらながら気づく。
「みんなと一緒に、音楽を奏でたいなあ……」

どこからか、鈴の音が聞こえる。
その音は重なり、重厚になり、どんどん大きくなる。
鈴の音だけじゃない、いろんな楽器の音……。
あっ、森の向こうからだれかがやって来る。
仲間たちだ。

ぼくは、音の聞こえる方へ向かって走り出した。

第三楽章　静かに、少しゆるやかに

第四楽章　非常に心地よく

作者：小川雅子さんプロフィール

児童文学作家。ポプラ社主催の児童文学新人賞で大賞を受賞し、『ライラックのワンピース』（小川雅子著・ポプラ社刊）にてデビュー。令和３年度静岡県優良推奨図書、埼玉県夏休み推薦図書等に選ばれる。大人になってバレエに目覚め、音楽とともにバレエ公演やレッスンを楽しんでいる。静岡県掛川市在住。

朗読：宮城嶋遥加さんプロフィール

舞台俳優。静岡大学人文社会科学部を卒業後、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。静大在学中にSPAC『ロミオとジュリエット』ジュリエット役でデビュー。その後、オリンピック静岡県文化プログラム『かぐや姫、霊峰に帰る』、フランスの馬術劇団による「Lunar Comet」など、静岡を拠点に国内外の舞台に立つ。

東アジア文化都市 2023 静岡県ポスターメインビジュアル起用。学術と実践両方の立場から演劇を探究した経験を基に、ワークショップ講師や演劇の手法を活用した企画のプロデュースなど、多様な活動を展開している。

このPDFデータは、2024年7月14日に行われたコレギウム・ムジクム静岡の第34回演奏会のために小川雅子さんに執筆をお願いし、演奏会で宮城島遥加さんによって朗読されたものをまとめたものです。

データの加工や二次配布は、固くお断りいたします。